

# ソードアート・オンライン 昏睡の万能剣士

六道聖

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦2022年 10月31日

別の学校に通う幼馴染の少女との下校中に、交通事故により意識不明に陥った少年の危機の中、夢の中に現れた女神様に助からないことを告げられ

命を助けるのを条件に、数日後に起きる事件”の解決してほしいと頼まれる

女神の力でチート能力を手に入れた少年”紺野龍矢”は

後に”SAO事件”と称されることとなるゲームの世界に閉じ込められ

そこで出会った仲間たちと共に現実世界への脱出を目指していく

---

# 目次

設定	1
アインクラッド編	
プロローグ リンクスタート	4
第1話 デスゲーム開始	8
第2話 突然の再開	20
第3話 薪割り特訓	28
第4話 第一層攻略会議	38
第5話 二人のビーター	48
第6話 和解の一步	60
第7話 鍛冶職人	69



# 設定

・レベルアップとSスキルポイントP

ステータスはS筋力T体力R、V知力I知力T、I敏捷N器用T、A運G速I、D器用E速X、L運U速Kの6つから成り立ち、初期ポイントとして20ポイントが配布されている。このポイント、そしてレベルアップ時に入手できるポイントはステータスを上げるものとスキルを上げるもの、両方を合わせたものが入手できる。通常のレベルアップ時には5ポイント、レベルが10、20、30、40 e t c . と10上がるごとに10ポイントを与えられ、それを各々自分に合ったステータス振りをすることになる。

ここで疑問に思うのがステータスとスキルのポイント、両方を合わせたものという点だが基本的にステータスに振っていくことになる。その理由としてスキルにポイントを振ってもそこまでステータス値に影響が出ないため（ステータスでSTR50だったとして、多くて5増える程度）。

スキルに対してはスキル開放とスキルの精密さを上げる場合のみに振ることになる。ただし、レベルをある程度上げ、前提スキルの熟練度をMASTERにしないと取得できないスキルもある。

・ステータス

ステータスは上記にも上げたがSTR<sup>筋力</sup>、VIT<sup>体力</sup>、INT<sup>知力</sup>、AGI<sup>敏捷</sup>、DEX<sup>器用</sup>、LUK<sup>運</sup>の6つから成り立つ。

STRは攻撃力に影響するステータス。リュウ達を除く攻略組の大半がSPを注ぎ、中には注ぎすぎの脳筋——筋肉好きの好戦ギルドも存在する。ただし振りすぎには注意必要。

VITは体力、最大HPに影響するステータス。SAO内で圏外に出ていくプレイヤーの大半が振っていくがその幅は広く、他のステータスに振るため少しだけもいれば、絶対生きるための殆どを振ってしまうプレイヤーもいるほど。

INTは主にスキルの効果、継続時間、状態異常付与効果上昇に関係するステータス。これに振っているプレイヤーはショートカット機能を少しでも増やしてポーション系のアイテムを登録し安全な狩りを心掛けている人が多い。

AGIは移動・攻撃速度、スキルの硬直時間に影響するステータス。これに振らなかった場合、速度の速いモンスターとエンカウントすれば間違いなく死を招く。突進系ソードスキルや剣を振る速度にも影響してくるため、リュウ達（主にリュウ、シリカ）は優先的に振っている。

DEXはクリティカル・弱点ダメージ上昇、投擲、ダガーやカタナなどの繊細さの必要な武器に影響するステータス。そのためこちらもリユウ達の中では優先的に振られているステータスになる。

LUKは攻撃クリティカル率、アイテムドロップ率、生産職や生活スキルに影響するステータス。リユウ達の中では主に女性陣に需要があり、リズの鍛冶・アスナの料理の上達っぷりはここから来ている。

#### ・レベルアップ

レベルアップは経験値が貯まると自動的に行われ、圏外でもSPを振れるがする人はまずいない。体力も回復するわけではないため、殆どの人がマイホームや宿でゆっくり考えている。

ステータスの振り直しにはユニークアイテムが必要らしいが、存在自体確認されておらず本当に実装されているかは定かではない（情報提供：アルゴ）

#### ・スキル

スキルにはスキル枠が存在し、最大10枠まで広がるがそれ以降はないため、必要スキルの入れ替えが攻略のカギになる階層も存在する。

## アインクラッド編

### プロローグ リンクスタート

俺は今眠っている――

しかし、ただ眠っているわけではない――

事故にあり、生と死の間を彷徨っている――

ある日の学校の帰り道、幼馴染と一緒に並んで帰っているときに事故にあった。

幼馴染をかばう際にちらりと見えた運転手はうつらうつらとしていたのを覚えてい  
る、居眠り運転だったのだ。

意識が遠のく中、耳に残るのは守りに抜いた幼馴染が泣きながら、俺を、俺の名前を  
呼び続ける声だった。

アイツが無事だったことを確認できた俺は、あとは母さんに任せておこうと意識を手  
放した。

母さんは有名な医者で、手術で助けられる命は必ず助ける名医と、医者たちの間では  
噂されている。だから、俺も母さんなら必ず助けてくれると信じて、しばらく意識を手



放せる。

しかし、心残りがある。

小さい頃からずっと一緒にいて、今でも俺のそばにいてくれる幼馴染の女の子〃結城明日奈〃

もし俺がこのまま死ねば、きつと彼女はあとを追ってくる。

そうじゃなくても、きつと俺の心配ばかりして衰弱していくに違いない。

確信があるわけじゃない、だが彼女がそういう人間だということは自信を持って言える。

だから、死ねない。死にたくない。

だが、俺の意思とは裏腹に彼女との思い出が走馬灯として駆けていく。抗わなくてはいけない。彼女には死んでほしくない、死なせたくない。

そう思い続ける俺にどこからか声が聞こえてきた。

(聞こえますか？私の声が聞こえたら答えてください)

答える？何をだ？

(あなたは生きたいですよね？生きないといけないと思つていますよね？)

当たり前だ、アイツを1人にはできない。1人にしたくない。

(でしたら声に出して答えてください。あなたの命を助けると言われたら、なんでもする覚悟はありますか?)

「あるに決まってるだろ。アイツの、明日奈のところに戻れるならなんだってやってやる」

(では私からお願ひがあります。もちろん報酬はさきほど言った命を助けるです)

「わかった。だがまずは依頼主のことを知らない」と割に合わないだろ。お前は何者だ?」

(私は女神です。漫画などでよくある死んでしまった方などを転生者にしてあげられる存在です)

「それで俺は何をすればいいんだ? 命の危機にある俺は現実世界には戻れないだろ?」

(あなたにはこの後、現実世界で起こる“ある事件”を内部から他の方々を救ってもらうことになるの)

「急に口調が変わったのが気にはなるが、事件とはなんだ?」

(あなたもやったことがあるでしょ?“ソードアート・オンライン”そして“ナーヴギア”この二つが関わる大きな事件よ)

「あれなら俺もβテストを一日だけだがやったことはある。VRMMOだろ?」

(何をすべきか、何が起きているのかは行けばわかるわ。こんな雑な説明で申し訳ない

けどお願い。もちろん転生者たちに与えるチート的なものも、あなたにあげる。どう？)

「まあ俺もあれはやりたかったからちようどいい、その話乗った。——で、チートのなものは何をくれるんだ？」

（何をというよりも、チートそのものね。ゲームだものバランスを崩すチート、それをそのままあげるわ。なるべく早期解決を望んでるからさ）

「そういう意味でか。まあいい、1つお願いがある、初期装備の中にローブをくれ。知り合いに遭遇しないとも限らない。そしたら、説明が面倒だ」

（任せておいて、それじゃあ早速お願いね。今の状態のまま、あの言葉、言えればいいから、アバター作成画面から始まるからね）

「了解した。じゃあ行ってくる——《リンクスタート》——」

この時、俺は想像もしていなかった。

頼まれた仕事が想像以上に大きく、想像以上に命に関わる大事件になるということを

## 第1話 デスゲーム開始

SAOの世界に降り立ち設定などを自分に合ったものに調整している時、それは起こった。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

鐘の音が響いた直後、視界が光に包まれていき、光が収まるとそこは始まりの街だった。

直後、空は赤い警告ウインドウで埋め尽くされ、強制的に集められたプレイヤーたちの中央上空にフードを被った男の姿が謎の粘液のようなもので形作られてこう言った。

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。」

私は茅場昌彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の存在だ。

プレイヤーの諸君は既に、メインメニューからログアウトボタンが消失していることに気付いているだろう。しかし、これは不具合ではない。繰り返す、これは不具合などではなくソードアート・オンライン本来の仕様である。

諸君らは今後自発的にログアウトすることはできない。また、外部の人間からの強制

ログアウトなどもありえない。

もし、それが試みられた場合——諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される。

誠に残念なことに、警告を無視したプレイヤーの家族、友人がナーヴギアの解除を試みようとした例が少なからずあり、その結果、213人のプレイヤーが現実世界から永久退場している。

しかし、十分に留意してもらいたい。今後、このゲームにおける一切の蘇生手段は機能しない。HPが0になった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される。

諸君らが解放される条件はただ一つ。このゲームをクリアすればよい。諸君らが、現在いるのはアインクラッド最下層。そこから、その層の迷宮区を攻略し、最上階にいるボスを倒せば次の層が解放される。それを繰り返し、アインクラッド第百層にいるボスを倒せば、ゲームクリアである。

では、最後に一つ。諸君らのストレージに私からのプレゼントを入れておいた。確認してくれたまえ。」

茅場がプレゼントという物を使用する前に、事前にストレージに入っていたローブをしつかりと深く装備し、先ほどまでなかった手鏡を使用すると再び光に包まれた。

その光はすぐに収まり、周りに見えないように鏡を覗くとそこには……現実世界の姿の金髪の自分の姿が映っていた。

「諸君らは今、何故と思っっているだろう。何故、ソードアート・オンライン及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんな事をしたのか、と。私の目的は既に達せられている。この世界を創り、干渉する為にのみ私はソードアート・オンラインを作った。そして今、私の目的は達成せしめられた。……以上で、ソードアート・オンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君、健闘を祈——」

茅場が最後のセリフを言い終える前に、茅場に向かって俺は暗器を投げつけた。

しかし、その暗器は茅場をすり抜け、遠くへ飛んでいくだけだった。

（ホログラム……とは違うか。だが、奴の言っていたことは事実だ。実際俺の横にいた男がポリゴン片となって消えていったんだ、受け止めるしかないだろ。とりあえず奴が言ったことをまとめておこう）

死亡条件

・ HP 0 になった瞬間

・ 外部（現実）からの強制ログアウト

クリア条件

・ 第100層クリア

まとめてしまえば簡単だった。要は死ぬな、生きろだ。だがクリア条件が厳しすぎる。

βテストの時はせいぜい10層が限界だったと聞いている。現状じゃ無理ゲーすぎる、たとえばβテスターだとしてもノーコンクリアまで何日、いや何年掛かるか分かったものではない。

（「先ずここを離れよう。全員に暗器での攻撃は見られてる、身を落ち着ける場所を探さない・・・？」）

そう思い行動に移そうと思っていたが、何故か体が、主に足が動かない。

原因を見るために視線を落とすとそこには3歳くらい年下であろう女の子が足にしがみついていた。

おそらく無意識だろう、絶望と恐怖から何かにしがみついているのが精一杯だということが顔を伝う涙でわかる。そうならないほうがおかしい。

俺は女の子が捕まっていない膝を折り、安心させるために抱きしめながら、この後の行動を言うことにした。

「俺はこの後寝床の確保と情報屋を探しに行く。一緒に行くなら立て。お前が落ち着くまでそばにいてやる」

その言葉を聞いて、彼女は顔を上げた。

おそらくこちらの顔は見えていないだろう。だが彼女は少し安堵したような顔で告げた。

「ありがとうございます……」

彼女を支えつつ予定していた宿代わりの農家に足を進め、なんとか他のプレイヤーに取られる前に寢床を確保した。

彼女が少しでも気持ちいを落ち着かせることができればと思い、風呂に入ってくるように言い俺は部屋に待機しつつ自分のステータスをちゃんと確認していなかったことを思い出したため確認することにした。

---

R y u u

レベル：10

称号：βテスター、シリアクティブ囚われし者、神に抗う者（神殺しに近い称号）

スキル：なし（無効）

主武器：刀

副武器：暗器

防具：ローブ



(今重要なのはこんな感じか・・・神に抗う者つてさっきの茅場に対する攻撃で経験値と一緒に手に入ったのか、ていうか神扱いかよ・・・スキルの無効がよくわからんが――)

スキルの部分を確認していると、“なし”ではなく“なし(無効)”となっていた。

試しに気配察知スキルを有効にしてみると、文字が明るくなりスキルレベルが表示された。  
れた。

もう一つ試しに有効化してみようと思い、体術スキルを選択すると有効化できてしまった。

この時俺は理解した。これが女神が言っていたチート能力なんだと。

噂でしか聞いたことがなくて確認できないが、体術スキルの習得にはクエストをクリアしないとといけない。それにも関わらず俺は有効化できた、おそらく全てのスキルがこうなっているんだろう。チートである、チーターの誕生である。

しかも、有効化したと勝手にスキルはマスター表記になっていた。

(たしかに楽に攻略は可能にはなったが、使い方、使うタイミングを間違えないようにして隠さないといけないんだろうなあ・・・)

「あ、あの!!お風呂ありがとうございました・・・」

「ん?あ、出た?どうだ、少しは気持ちも落ち着くわけないか。でも少しは気分晴れただろ」

「・・・はい。あの、私シリカって言います」

「俺はリュウ、よろしくなシリカ」

「はい、よろしくお願ひしますリュウさん。・・・その、リュウさんはこれからどうするんですか?」

どうするか、それを聞くことは落ち着いてきたとはいえ、きつと不安なんだろう・・・だから俺の予定を聞いて、それに合わせていきたいんだろう。だが俺の予定は少しの間は決まっている。それを聞いたらシリカはまた1人になることへ不安を覚えるだろう。そうわかっているけど、俺はしっかりとシリカの目を見ながらこれからのことを伝えていった。

「そうだな・・・俺はたぶん攻略組と一緒にクリアを目指そうかなあつて思ってる。まだ決定ではないけど遅れてでも最前線には行こうかとは思ってるよ」

「そうなんですか・・・怖くないんですか?」

「いや怖いよ、行かなくていいなら行かない、行きたくないかな。はじまりの街で簡単な

クエストを受けて、誰かが攻略してくれるのを待ち続ける。でもそうも言ってられないんだ」

「どうしてですか、嫌なら行かなくても・・・」

「SAOのβテストでの最高クリア階層が10層までなんだ。1人でも多く協力し合わないと100層クリアなんてできない。だから1日だけでもβテストに参加した俺はフィールドに出ようと考えてるよ」

「・・・リユウさんは強いですね、私はきつきりユウさんに声を掛けてもらってなかったら今も広場で泣いてると思います・・・」

「強くなりたいよ、今だって恐怖に押しつぶされそうだから。もし平気そうに見えるならそれはシリカの前だからかな。女の子の前で情けない姿なんて見せられないから」

そう言いながらシリカの頭をやさしく少しでも落ち着ければと撫でてやっていると、部屋の外から扉をココンコンコンと叩く音が聞こえてきた。ここにいることは誰にも教えていなかったはずだ。

（話す暇もなくシリカを連れて避難してきたんだけどな）

そう思いながら扉を開けると、そこには顔に3本線の髭を描いた女の子？がいた。

「おいおいオレたちの顔を忘れたって言わないよナ、リー坊？」

「忘れてねえよ、ただお前が女か男かわかんなくなっただけだ、アルゴ」

「本当力？」

まあいい力・・・と若干呆れているアルゴを部屋に招き入れた。

アルゴがわざわざ直接来るってことはよっぽどのがあったか、あるいは・・・冷やかしか。

「安心しろ、リー坊。最初は冷やかしのつもりだったが、今は純粋に心配してきてんだよ。お前のことも、その女の子のこともナ」

「別に何も疑ってねえよ、冷やかしに來ただけなら叩き出したけどな」

「にやハハハ、そう言いながら水を出して歓迎してくれるリー坊のこと、オレっちは好きだゾ？」

「ありがとよ。で、本当は情報収集にでも來たのか？」

「いや本当に心配してきたんだよ。リー坊、前線に行くつもりなんだろ。その子はどうするんだヨ」

「すぐには行かない。シリカにある程度の戦闘と護身術を教えるからになるはずだ」

「・・・そうか、安心したよ。オレっちは大量にポーシオンを買ってから、もう戻ってくるつもりはないんじゃないかって思ってたよ。その子連れていくリー坊の顔がそんな顔に見えてナ・・・」

そう言うアルゴは心から安心しているようだった。

街にある宿や宿代わりになる場所の情報は俺がβテスト時にアルゴに提供している。その時の寝床もここだったためここに来て俺を見て、俺の口から聞いて安心したんだろう。

「シリカ、こいつはアルゴ。情報屋で売ってくれる情報はほとんどが確かなものだ、売るときはしっかりと金を取ってくるけどな」

「シリカといいます、よろしくお願いしますアルゴさん」

「おう、よろしくなシーちゃん」

「で、アルゴがここに来たのは俺たちの心配をしてきただけなのか？」

「いやリー坊にお客さんだ。早急に会いたいわって言われてな、入れていいか？」

「ああ、大丈夫だ」

入っていいゾ、とアルゴが扉の外に声を掛けに行くと、外から2人入ってきた。

1人は黒髪で年が近そうな少年とフードを深く被った人だった。

「悪いな、リュウ。押しかけるような真似をして」

「アルゴが連れてきたのってキリトだったのか、でそつちは？」

「実はお前に会いたいわって言ったのはこいつなんだよ。俺がお前の情報を貰おうとアルゴと話してたら、なんでもお前が知り合いに似ているかもしれないから会ってみたいってな」

そういうことだったのか。アルゴはいくらキリトの連れとはいえリアルルの知り合いかもしれないという理由では簡単に情報は売らない。つまり俺の特徴と合致するところがあったということだろう。

「それで俺はお前が探していた知り合いなのか？」

「……」

「おいアスナ、どうなんだ？」

「え……」

「どうした、リー坊？」

「いや、なんでもない。ただ幼馴染の名前に似てただけだ」

「……リュウくん!!」

「「え？」」

その声に俺とキリトが反応して声の方を見ると、それと同時に俺はフードを深く被っていた長い栗色の髪の子に抱き着かれていた。

その髪と色を見た瞬間に俺には嫌な予感が頭を駆け巡った。でもまだ他の知り合いなのかもしれないと自分を誤魔化していると抱き着いてきた子がそつと頭を上げて顔を見せてきた。

そして、俺の目に映ったのは紛れもなく小さい頃からずっと一緒にいる結城明日奈本

人だった。

「・・・リュウ、くん・・・」

「アスナ、なんで・・・なんでアスナがここに・・・」

「それはこつちが聞きたいよ！なんで、なんでリュウくんがここにいるの!?だってリュウくんは・・・」

俺とアスナがお互いが何故ここSAOにいるのかわからなくて混乱している中、当然のことだもつと混乱している奴らが部屋にはいた。

「え?え?」

「お、おい、リュウ?何がどうなってるんだ?」

「オレっちもそれが気になってしょうがないぞ。シーちゃんだつて混乱してるしナ」

「わ、悪い俺も頭が追いついてないんだ。とりあえず整理したいからアスナは離れてくれ」

「あ・・・う、うん・・・」

俺とアスナとシリカがベッドに座り、キリトとアルゴが部屋に置いてある椅子に座つたのを確認して状況の整理が始まった。

## 第2話 突然の再開

5人全員が座りなおしたのを確認した後、まずキリトの状況確認から始まった。

「えつとリュウとアスナは現実世界では幼馴染で、お互いにSAOをやっていることは知らなかったってことでいいんだよな？」

「ああ、その通りだ」

「うん……」

「アスナさんどうかしたんですか？リュウさんとせつかく会えたのに元気がないように見えますけど？」

「ああ、それは俺も気になってたんだ。リュウと再会した瞬間のアスナは嬉しさというより戸惑ってるように見えただが？」

「アーちゃん、話せることだけでも話せないか？ここで聞いたことはもちろん外部へは漏らさないからサ」

「それは……」

アスナの元気がないことを心配するシリカとそのことに疑問を覚えるキリトとアルゴの質問にアスナは言葉が続かないでいた。



だからこそ俺はその後に続く言葉を口にした。

「それは俺に原因があるんだよ。な、アスナ」

「っ！リュウくん・・・」

アスナは今にもまた泣きだしそうな顔でこちらを見上げてきたため、ただ優しく頭を撫でてやった。

「お前に原因って喧嘩でもしたのか？」

「いや、そうじゃない。喧嘩とかじゃなくて、俺がここSAOにいることが原因なんだよ」

「は？お前がここにいるのが原因ってなんだよ？」

「おいおいリー坊・・・もうちよつとわかりやすく言ってくレ」

「俺は本当ならここにはいないんだよ。今は意識不明で病院にいるはずだからな」

「「え？」」

原因を聞いた3人は当然意味がわからないだろう。

突然自分が原因でアスナが元気がなくて、自分は意識不明なんて言われてもなんて返していいかわからない。

「ちよ、ちよつと待て。意識不明？じゃあお前はナーヴギアを付けずにここにいるってことだよな？」

「そうだな。手術が終わった後にわざわざナーヴギアを付けるほど俺の母さんはおかし

くないな」

「手術か……。リー坊、事故か何かか？」

「ああ、おそらく脇見か居眠りのどっちかだろうな」

「そんな……」

俺を挟んでアスナと反対側に座っているシリカもショックを受けていて、また無意識だと思いが俺の服の裾を震える手で握っていた。

その手を安心させるために握ってやり、考えに浸っているキリトのためにも話を続けた。

「話を続けるな？キリトはどうして俺がこの場にいられるのか考えてるんだろ？」

「あ、ああ。常識的に考えたとしても無理だろ？」

「そうだな。ところでキリト、お前は転生みたいなことありえると思うか？」

「転生ってあれだろ？漫画やアニメである異世界転生みたいなものだろ？」

「わかりやすいのはそれだな。俺はそれに近い状態らしい」

これは俺にこのことを依頼してきた女神から聞いたことだ。完全な転生や転移ではなく、夢を見ているというわけでもないらしくナーヴギアを着けて閉じ込められているキリトやアスナと同じでSAO内で死んでしまうと現実でも死んでしまうらしい。

そのことをしつかりと伝え、自分がチート能力持ちだということも伝えた。

もちろん俺の状態は絶対に外に漏らさないようにとアルゴにも念を押した。

「それにしてもリー坊はよくその女神っていう奴の依頼を受けたな。オレっちだったらもつと情報を聞き出してから飲むか決めるけどナ」

「だろうな。だけど俺は今後の人生を天秤に掛けられてたんだ、それなら危険かもしれないが生きられる方を選ぶ」

「俺だつて同じ立場になつたらリュウと同じだとは思うが、騙されるかもとか考えなかつたのか、明らかに胡散臭いだろ？」

「確かに騙そうとしてるんじゃないかとは疑つたさ、でもやつぱりそれ以上にまだ生きたい気持ちのほうが強かつたんだ。たとえ騙されてチート能力を貰えなかつたとしてもそれは騙された俺が悪いんだ、生きる権利を貰えただけでも儲けものだと思わないか？」

「それはそうだけどな・・・」

キリトが言いたいことはわかる。

キリトとはβの時はおすすめの宿の場所を教えるために話しただけだった。それでもキリトにとっては力のなかつた俺は守つてやりたいと思えたんだろう。だからこんなにも心配をしてきている。

「キリト心配してくれるのは嬉しい。だけどここで死なないかぎり俺は生きていられ

る、だから心配するな。どうしても心配・不安になるっていうなら俺の頼みを聞いてくれ」

「わかった、で頼みって何だ？」

前々から信頼できる人に頼もうとしていたことをキリトに頼むことにした俺は順番にちやんとした。それはこのSAOで生き抜いていくため、クリアをするために必要なことだと俺は考えていた。

そしてキリトへの頼みごとというのがこれだ

- ・可能な限り攻略最前線に行くこと
- ・アスナに戦い方を教え、しばらく一緒に攻略していくこと
- ・命を落としかねない行動は極力しないこと
- ・何かあったら必ず相談すること

この4つを提示すると当然ながら横から反論があった。

横から、そうアスナとシリカだ。

俺はβ時代に圏外出ていたキリトだからこそアスナを預け、自分の命を守る程度の力を手にしておいてほしいそう思っていた。

「いや、嫌だよりユウくん!! S A O （さうおー）だったとしても会えたことには変わりないのにまた離ればなれは嫌!!」

「私もアスナさんと同じです！せっかく会えたのにあんまりですよ！」

「お、おい2人も落ち着けて」

「キー坊の言うとおりだ、オレっちもアーちゃんとシーちゃんと気持ちは同じだぞ。でも最後まで話は聞いたほうがいいゾ？」

アスナはまた泣き顔になりながらシリカはすごく怒ってますと言わんばかりに手を強く握ってきた。

でもキリトとアルゴの言うとおりちゃんと話は最後まで聞いてほしい、まだ話は続いているんだから。

「俺だつてアスナと会えたのに離れて行動するのは辛いんだ、でも理由があるんだよ」

「リュウ、もしかして攻略組の戦力が関係してるのか？」

「なるほどそういうことか、さすがリー坊自分のことより他人のことをちゃんと気にしてるんだナ」

「褒めてないだろ、アルゴ」

「いやハハハそんなことないサ、と誤魔化しつつ話を続けるように促してきた。

話を戻そう、さつきキリトが言った攻略組の戦力それはその攻略組が弱い人ばかりだからではない。βテストだったり別のMMORPGをやっていたやつが攻略組にいるだろうから戦力としては申し分ないだろう。でもここはβテストではない、真の戦場

というべきだろう。自分の命を掛けた真の戦場、少しでも戦える人を増やして死者を減らさないといずれ崩壊する。

俺は知り合いが死ぬのを見たくない。

アルゴは情報屋だから例外を除けば外に出て戦闘することはないだろう、だがアスナたちは俺と一緒にいればいずれモンスターやPKと対峙することになる。それに階層が上がれば敵は強くなる、他の人を優先して守るのが難しくなる。守れなかったと後悔なんてしたくない。

そのことを伝えると理解はしているが納得がいかない表情をアスナはしていた。

「俺がアスナと一緒にしばらく行動するとしてお前は どうするんだ？」

「俺はシリカに戦い方を教えるのと、街での戦力探しだ。戦えるが圏外に行かない奴を見つけたら説得しようと思う」

「じゃあオレたちはそういうやつがいらないか情報を集めてリー坊にリークしてやるヨ」「悪いな、助かる」

俺の状態や今後の話をしていたらいつの間にかかなりの時間がたつたらしく、外はすっかり暗くなっていた。

アルゴは街にすでに宿をとって明日から情報を集めるからと帰っていったが、宿を決めていなかったキリトとアスナを俺とシリカのいる農家に泊めることにした。こ

こは普通の農家と違い空き部屋が2部屋あり、両方確保していたため男部屋女部屋として分かれて寝ることにした。

やつとデスゲーム1日目が終わりを告げる、つまりこれからデスゲームが始まるということを心に刻み、俺たちは眠りについた。

## 第3話 薪割り特訓

キリト、アスナと再会したデスゲーム初日から一夜明けた早朝、俺はこの農家にだけ存在する隠しクエストをこなしていた。

そのクエスト名は「薪割り」である。

他のプレイヤーが見たら、「ただの雑用じゃねえか、意味不クエスト」「納品数多すぎだろ、クソクエ」って言われるに違いない、まあ間違っつてはいないがやればやるだけの価値が出てくるクエストなのだ。

薪割りの手伝い

Data

期間：1日

依頼人：農家の主婦

概要：蓄えの薪が少なくなっちゃったため

薪の補充をお願いします。

400本お願いします。



達成条件：薪400本納品

Reward

Exp:100 Col:1000

???

---

これがクエスト内容、そして本当の目的は報酬の???になっている部分だ。

βテスト時にこのクエストが何故か気になってしまいクリアしてみるとSスキルポイントPを入手できたのだ。

ちなみにこれはアルゴにもリークしていないため他のプレイヤーで溢れることはないはずだ。もし、アルゴが知りつつ情報を流していないとしたら、それは俺たちのためなんだと勝手に解釈している。

「リユウくん、おはよう。何してるの、薪割り?」

「おはよう、アスナ。ああ、まあクエストなんだけどな薪なんて俺たちには松明くらいでしか使わないだろうし……ってシリカは眠そうだな?」

「だいじょうぶですう……おきてますよお……」

「あはは……昨日少し二人でいろいろ話して遅くなっちゃって、それにまだ朝早い

し。・・・キリトくんは？」

「まだ寝てるよ、たぶんリアルでも早起きはしてないだろうなアイツ」

「リュウくんが早すぎるだけだと私は思うけど？」

「うっせ」

リアルでは別に筋トレのために早起きをしていたりしたわけではなく、部活の朝練でしつかり集中できるようにするためだけの早起きが習慣になったのだ。

外に置いてあるベンチに眠そうなシリカと共に座っていたアスナがふと思い出したように疑問を口にした。

「そういえばこういう農家でもクエストってあるんだね？」

「たしかにあるけど、ここのは他のプレイヤーには知られてないクエストなんだぞ？まあたぶん知られてたとしても誰も薪割りなんてやろうとしないだろうけどな」

「でもリュウくんはやってる。ってことは何かあるの？」

「ああ、実はスキル取得に必要なSPを入手できるんだよ、薪割りだけで」

「ふーんそうなんだ・・・」

「わかってないって反応だな・・・まあアスナは初心者だからSPとかも知らないだろうし覚えてからだなつと、よしおしまい」

「もう終わりなの？」

「ああ、400本割り終わったからな」

「お疲れ様・・・って400本!?!リユウくん、何時からやってたの!?!」

「ん?5時くらいだな、まあいつもそのくらいに起きてるし」

アスナが信じられないって顔をする中、俺は依頼人に報告に行つてクエストを達成した。

まあSPは俺には必要はないんだがちゃんともらえるか確認のためでもあった。

そうこうしているうちにシリカもすっかりと目を覚まし、キリトもようやく起きてきた。9時起床寝すぎだ。

女の子が先に起きて起こしてくれるとでも思っていたのだろうか?赤の他人を起こすほど世の中そんなに甘くねえんだよ、アホ」

「うん、俺が寝すぎなのは理解した。でも罵られるほどのことはしてないぞ?本当に寝すぎただけだし・・・」

「俺も口に出してるとは思わなかった、それについては謝る。ところでキリト、初期SPはどうした?」

「初期か?初期はとりあえず片手剣とスキルのスラント、ホリゾンタル、バーチカルに振つて、残りをSTRに振つてあるけどそれがどうかしたのか?」

「すぐにSPが獲得できるクエストがあるって言ったらお前受けるか?」

「そんなクエスト聞いたことないぞ。あるっていうならすぐにでも受けてくるんだがな」

やはりキリトでも知らない隠しクエストだったらしいが話したからにはやっぱりキリトには一度でも受けてもらいたい、受けさせたい。

何故か？このクエストは低レベルでは大変だがレベルが上がって強くなったところにやると凄くありがたみを感じるクエストだと思っただからだ。

「ならやってみるか？家の裏に農家のおっさんがいるから受けて来いよ」  
「そうなのか？ならちよつと行ってくるよ」

そう言つてクエストを受けに行つたキリトはすぐに後悔しているような顔をして戻つてきた。

「リュウ、これ本当に割に合つたクエストなんだよな？」

「俺はそう思うけどな。お前がどう思うかは報酬を見てから決めるしかないな」

「だよな、はあ・・・やるか」

薪割りを始めたキリトが思い出したかのように話を始めた。よっぽど時間を無駄にしたくないのか薪割りを続けたままだ。

「リュウとシリカは何でまだいるんだ？俺たちが言うのもなんだけど、早めに街で探したほうがいいんじゃないか？」

「それは今のお前のパートナーに言ってくれ。俺は行く気満々だったのに昨日少し夜風に当たってたら泣き落としされました」

「昨日の今日だけどアスナに対しての意志弱いよな、お前」

「キリト」

「なんだ・・・つとー!」

「俺は自慢じゃないが小さい頃からアスナの泣き落としに勝った試しがない」

「本当に自慢じゃないな」

話しながらでもキリトの薪割りペースは落ちることはなく丸太10本終わったところで休憩のために斧を置いてこっちに来た。

薪80本ご苦労、あと320本頑張りたまえ。

「シリカには言わないでいいのか? 街に行くつもりだと思うぞ?」

「心配いらないよ、キリトくん。シリカちゃんには昨日リュウくんに話す前に話して納得してもらってるから」

「はい、アスナさんからちゃんとお話は聞きましたから大丈夫です」

「シリカも納得してるなら俺はいい。それよりキリト、さつさと終わらせないと時間もつたないぞ?」

「わかってるよ、割に合ったSP量なのを祈るしかないか・・・」

あと320本頑張りたまえ。

キリトの割った薪をロープでまとめていると、街の方から女の子が一人、アルゴによつて拉致されてきた。ああ、可哀想に……こうしてまたアルゴにあることないこと情報を抜かれたプレイヤーが――

「別に誘拐してきてないぞ。風呂付き宿教えてほしいって言われたし、リー坊の要望にも合いそうだから案内してきたんだ。感謝しろヨ？」

「ああ、感謝はしてるけど空き部屋ないぞ？各部屋ベッドは2つずつのはずだし……というか心の声を読むな」

「私は別に大丈夫だよ？話し合いで私かシリカちゃんと同じベッドで寝ることになっちゃうけど」

「私も大丈夫です」

「ご迷惑じゃなければお願いします。昨日はしようがなかったけど、さすがに不安で……」

「迷惑じゃないよ、私アスナよろしくね？こっちの二人はリュウくとシリカちゃん。で、あつちで薪割りしてるのがキリトくん」

「あの、コハルって言います。私こういうゲーム初めてで、というかゲーム自体あまりやらなくてわからないことだらけで」

「ならアスナたちと一緒に覚えていけばいいさ。アスナとシリカも初心者だから俺とキリト、つて言ってもキリトが主に教えるからさ」

その言葉に安心したのか、アスナとシリカに進められて農家備え付けの丸太の椅子に座り、キリトの薪割りについて尋ねてきた。

「キリトさんは何で薪割りを？」

「ああ、これはリュウに騙されてやらされてるクエストなんだよ」

「いや騙してないつての、騙してるかどうかはクエスト終わってから言えよ」

「薪割りのクエストか。オレっちも初耳だな」

「隠しクエストみたいだからな、リークはしばらく待つてくれよ？」

「にやハハハ、早く許可くれないと勝手にリークしちゃうからな？で、報酬は何なんだ？」

「SP」

「らしいぞ。その確認のために俺がやってるつてわけだ。400本納品のクソクエだ」

「たしかにクソクエだな。公に出てこないクエストらしいと言えばらしいナ」

「てか、キリトいいかげん剣使つてやれよ、じゃないと下手したら夕方までかかるぞ？」

「剣でやっていいならそう言ってくれ・・・リュウ、こつちに丸太投げしてくれ」

「了解」

キリトに言われ、丸太を投げ続けた。

一時間後……

「終わった……」

「キー坊、お疲れさん。で、報酬はどうダ？」

「ちよつと待ってくれ、えつと……SP5!? なありユウ、このクエスト上手すぎないか？」

「だろ？だからしばらくはリークしたくねえんだよ」

「ねえリユウくん、私たちにもわかるように説明して？SP5だと良いクエストなの？」

「3人はレベルアップ時に貰えるSP量を知らないからわからないかもしれないけど、1クエストクリアで5も貰えるのは修正レベルなんだよ」

「このSAOはレベルアップ時に貰えるSPはカンスト、最大レベルまで基本は5つて決まってるんだ。序盤はレベルなんてモンスターを狩ったりクエスト報酬で簡単に上がるけど、後半は必要経験値がかなり多くなってくるんだ。だからこのクエストを序盤に数をこなせば攻略に困らなくなる可能性があるんだ」

「少しでも死の危険を避けられるのに越したことはないだろ？で、このクエストをリーク



すれば……」

「必ず攻略組のプレイヤーでござった返すから先にある程度稼いでおきたいってことだ  
ナ、リー坊？」

「そういうことだ」

ここまで話を聞いてアスナは何となく理解したような感じで、シリカとコハルはい  
まいちよくわからないといった感じだった。

詳しくは近いうちに話すから今は重要で大切なクエストだと思っておけばいいと  
言っておいた。

アルゴも俺たちからのリークを気長に待ってるって言って街へ戻っていった。

そして、農家仲間？にコハルが加わってから俺たちは毎日薪割りと初心者講座に明け  
暮れるのだった。

## 第4話 第一層攻略会議

コハルと知り合ってから数日後、ついに攻略会議が開かれることになった。

ちなみにアルゴがその情報を持って遊びに来なかったら、俺たちは会議に参加せず、下手をすれば第一層攻略にも関わってはいなかっただろう。

皆で真剣に、たまにワイワイとスキル振り考察をしていたら時間があつという間に過ぎていた。

前日には取ったスキルの練習と連携の練習、MMO初心者である3人の勉強会のみで終わり、攻略会議に備えることにした。

そして翌日、俺たちは少し早めに会場に向かった。

そこにはすでに少数ではあるが人が集まっていたため、目立ちにくいけど全体を見れる位置に移動して会議が始まるのを朝食を取りつつ待つことにした。

「アスナ、また料理スキル上がったか？」

「本当!?もうリユウくんのお嫁さんになっても恥ずかしくないね!」

「はいはい、そうだなあ〜」

「むう……」

「でも本当にアスナは料理上手くなったよな。俺たち頼りっぱなしだし」

キリトの言う通り、アスナだけは料理スキルを取っていて毎日作り続けていた結果スキルレベルが上がっていき、今では俺たちの食事の大半がアスナが作った料理になっている。

「そういえばキリト、前に頼んだ情報はアルゴにリークしてくれたのか？」

どれのことか分からなかったようで少し考えていたが、今の状況から察したのか首を縦に振っていた。

「この間シリカと調べてきたっていうボスの情報だろ、ちゃんと言われたことをアルゴに教えてきた。でも本当なのか、ボスが三本目の武器にカタナを持っている可能性が高いついていうのは？」

「ああ、迷宮区内の隠し部屋に壁画があったんだよ。そこにはコボルドロードが左右に湾刀と骨斧、その背中にカタナらしき物を背負ってたんだ」

「私もすっかり見ましたよ。たしかにカタナみたいな武器を持ってました」

「やっぱりβとは違ってきてるんだな。同じだったら10層くらいまでは対策がもてたんだが……」

「他のゲームとかでもこういうことはあるのか、βとは違う部分とか？」

キリトに違いがあるか聞くと、記憶を辿っているのか腕を組んで少しだけ考え込んでいた。

同じであつてほしいと思う俺の気持ちとは裏腹にキリトから出たのは否定だった。

「いや俺の知る限りではないな。こりや一層目からかなり警戒しないと犠牲者が増えるぞ」

「だな・・・でも俺たちはやれることが限られる。だからやれるだけのことをやって、犠牲者を可能な限り減らして攻略しないと」

「そうなければいいんですけど・・・」

俺とキリトが警戒を強める中、コハルが不安を口にした。

「実は昨日広場でβテストは出て来い！って言っている人がいたの・・・」

「βテストをか？」

「うん、お前らのせいで人が死んだんだ！って・・・」

「そんなことがあつたんだ・・・」

コハルの不安が少しでも和らげばとアスナが手を握つてあげていた。

そんなコハルに俺も少しでも和らげばと頭を撫でてやっていた。

「コハル、そいつの言うことは気にしないでいい。こんな状況だとテストだつて無理なことはあるし、死んだ奴の中にはテストもいたつて話だ。それが分かっているのに

テスターにだけ責任を押し付けるのがおかしい」

「みんな不安な状況なんだ。そいつが他人に責任を押し付けたくなくなる気持ちは分からなくもないけど、テスターを名指しするのはどうかと思うな」

そんなことを話しているうちに攻略に参加を決めた人達が次々と広場に入って各々好きな場所に座って会議の開始を待っていたところ、水色の髪の男が広場の中央に立ち話し始めた。

「はい、それじゃあ始めさせて貰います！皆、俺の呼び掛けに応えてくれてありがとう！俺はディアベル、職業は気持ち的に、ナイトやってます！皆も知っての通り、俺達はこのデスゲームに閉じ込められた。でも、ここで引き籠ってちゃクリアできるゲームもクリアは出来ない！ここに集まってくれた全員はクリアしようとする意思がある人だ。その勇氣に称賛を贈りたい」

俺は本当はのんびりと引き籠っていたのが本心なんだが、死にたくないしキリトやアスナはほっとくと休みもせず戦って死ぬに違いない。・・・そんなのはゴメンだ。そんな俺の気持ちを察したのか、アスナがこちらをジーツと見つめてきていた。

「・・・なんだよ、アスナ」

「ん？リュウくんは本当は戦わずに引き籠ってたいんだろなあって思ったただけだよ？」

「いつも思ってたけどお前エスパーパーなのか？人の心の中を簡単に読みやがって」

「誰のでもってわけじゃないよ、リュウくんだけだよ。リュウくんの考えてることくらい分かるんだから」

「ヘーじやあ俺が今思ってることもわかるのか？」

「もちろんだよ！ちよつと待ってね・・・」

そう言ううとアスナは俺のことをさつき同様ジーーツと見つめてきた。

その直後、アスナは顔を真つ赤にして俯いてブツブツと何かを呟いていた。

「・・・リュウ、お前何考えたんだよ」

「ん・・・秘密だな。知りたかったらアスナに聞け」

「・・・いや、やめとくよ。騒ぎにして目立ちすぎても嫌だしな」

そう言われてアスナの方をチラツツと見たキリトは、こちらを睨みつけているアスナと目が合ってビビったらしく聞かなかったことにしようと思ったようだ。

「その君たちも大丈夫かい？」

その声に広場を見るとデイアベルがこちらを見ていた。

「ああ、ゴメンゴメン。で、なんだっけ？」

「パーティと攻略時の配置の話。君たちは人数の関係で後ろで雑魚とボス戦時の取り巻きの処理に回ってもらうことになるけどいいかい？」

「ああ、それでいいけど。いくつかいいか？」

「あ、それなら俺も」

「ああ構わないよ」

俺とキリトが手を上げて発言の許可を求めると、ディアベルから許可が出た。

話聞いてなかった奴の話をよく聞く気になるなど思った、口にはもちろん出さないが。

「俺からは1つだけ、攻略に参加する全員に言えることだけどスキルを使うときは十分注意してくれ。周りの仲間っていうよりスキル使用後の硬直に関してだけだな」

「それは皆も理解しているはずだけど、確かに改めて注意をしておくことに越したことはないね、ありがとう」

「じゃあ俺からだが、1つはこいつが言った通りスキルについて。もう1つは俺たちに關してなんだが——」

「配置換えは申し訳ないがさつきも言ったができないよ？」

「ああ、分かっている。俺が言いたいのはボス攻略時だ。攻略中はボス討伐部隊がピンチになることは予想できるだろ？そこで俺たち後続が助けに来てLAを貰って行っても文句は言わないでくれ」

「ああ、もち「ちよつと待ってや！」ろん・・・何だいキバオウさん」

俺たちが伝えたいことを伝えディアベルが了承しようとした直後、キバオウという変な髪形、イガグリ頭の関西弁のおっさん？が遮るように文句を言ってきた。

「L Aを貰って行ってもって自分らどうせ最初からそのつもりでパーティー人数減らしたんやろ！」

「変な言いがかりはやめてくれ、最初からそのつもりなら俺はこいつだけを連れてここに来て2人だけでL Aを貰って行く」

キバオウの言いがかりに対して、キリトを巻き込みつつ話を続けた。

「話を続けるが、皆も道具屋で情報屋の本は貰って読んだと思うがボスの数値が正確とは限らないし、もしかしたらβテスト時のものかもしれない、確実なものじゃないんだ。聞いた話によれば左右に湾刀と骨斧って話だけどそれはβテストの時って話だ、他のものにも変わっているかもしれないし、増えているかもしれない。そうなれば被害が増える可能性も増える。それを防ぐためには前衛だけじゃなく後続とのスイッチも大切だろ。だから言わせてもらったんだ。俺たちはクリアして現実世界リアルに帰ることを目的としていて、アンタみたいにL Aを意識してやってるわけじゃないんだ、キバオウ」

「なんやと!?!自分、ワイがL A目的って言いたいんか!?!」

「そう思っても仕方ないだろ、L Aって言葉に反応して反論されたら誰だってそう思う。それこそお前が嫌うβテスターなんじゃないかってな」



「確かにそうだね。キバオウさんには悪いけど俺も少しだけテスターなんじゃないかって疑ったよ」

「なんでやディアベルはん！話もろくに聞いてなかったこいつらの味方するつちゆうんか!？」

「敵なんていねえだろ、ここに居るのは全員攻略を目的とした仲間だろ。それを、その纏まりをβテスターは悪みたいなことを言っつてぶち壊そうとしている自覚はあるよな、キバオウ」

「アイツらは自分らだけレベル上げて強くなってるやないか！その方法とかも流さずに自分たちだけのものになっている奴らを否定して何が悪いんや!？」

キバオウの言うこともわからなくもない。βテスターたちはニュービーと比べ、いいレベリング場所を知っている。そこを利用して強くなるのは当然だろう、だが――

「そのレベリングの場所とかをお前はテスターたちに聞こうともしなかっただろ？テスターたちに自分たちも強くなりたから場所を教えてほしい、そう言えば済むだけの話だろ。手伝ってくれなくても場所はアイツらは教えてくれたはずだ。MMOってのは強者が弱者を蹴落とすためにできてるんじゃない、確かに弱者を見下す奴は中にはいる。でもそれならそいつらとは関わりなければいいだけの話だ。お前は自分で行動を

起こさずに文句だけを言いまくってる、見下してる奴らとやってることは変わらないんじゃないか?・・俺は別に説教をしたくて発言したわけじゃない。でも覚えておいてほしい、死んだ奴の中にβテスターもいたってことを」

「.....」

俺の言葉に対してのキバオウからの反論はなかった。

きつと思うところがあつたんだと思う。

「ディアベル悪かったな、話が長引いて。俺からは以上だ」

「いや、君の言うことももつともだからね。もしろい話を聞けたくらいだよ」

俺が話し終えると、4人からお疲れ様つと言われた。

言いすぎじゃなかったかと思っっていると

「俺も似たようなことを言おうと思っただから助かった」

そのキリトの言葉に対して、じゃあ入って来いよと思っただのは俺だけじゃないはずだ。

そのあとは適当に5人で喋っていると、会議は終わったのかみんながぞろぞろと広場を出て行っていた。

俺たちもホームに戻るかと話していると1人の男がこちらへやってきた。

「よう、さつきは会話に入れなくて悪かったな」

「えっとエギルだったか？俺はただ言いたいこと言っただけだから問題ないぞ」

「それならよかった。明日はお互い頑張ろうぜ」

「ああ」

そう言っつてエギルは去っていった。

明日はいよいよ第一層攻略開始、俺たちは今一度お互いの戦い方を確認しながら攻略に備えていくのだった。

## 第5話 二人のビーター

俺たちはいよいよ第一層攻略の日を迎えた。

アスナやコハル、シリカが緊張するのは無理もないが、今のSAOはただのゲームではなくデスゲーム。

そのことはリユウやキリトにも緊張感を与えていた。

俺たちの現在位置は迷宮区の中腹あたりだろう。

各隊に分かれて進んでいたのはいいが――

「アイツらやる気あんのかよ……」

「それについては同意だな、まさかポップした敵をほぼ無視して行くなんでな」

そう、俺たち以外全員先に進んでいるのだ。

会議で後続が取りこぼしを処理しながらって話だったのに、後続に入っているはずの他の隊の奴らまで先に進んでいった。

経験値すらいらなとか強くなる気はあるのかなのか。

「でもその敵をちゃんと倒していく私たちも凄いですよね。少し前からは考えられないかもです」

「私は少し嬉しいかな。皆に付いていくのがやっとだし、経験積むためにはいいかも」  
「そんなことないよ、コハルは強くなったよ！ね、リュウくん？」

「ああ、十分戦力になるから心配いらぬ。むしろコハルが槍を使ってるから戦いやすい場面だつてある」

槍を使うコハルと一緒に行動するようになってからは作戦にもバリエーションが増えた。

槍特有の間合いを利用しての攻撃は敵に隙を作るのに最適だった。

だがそのためにコハルが攻撃する回数は少なかった。それが不安にさせる要因だったらしい。

そうこう話しながらモンスターを倒していき、今自分たちがいる辺りのモンスターを殲滅し終えた。

「うわあああああああああ！」

先に進んでいる本隊に合流するべく進んでいると悲鳴がボス部屋があると思われる方向から響いてきた。

いや、危機の狼煙はとっくに上がっていたのかもしれない。

「まさかアイツらもうボス部屋に入りやがったのか!？」

「だとしても今の悲鳴は明らかにおかしいぞ、リュウ！」

鼓舞のための叫びならまだしも今聞こえてきたのは明らかに絶望の悲鳴だった。走りだそうとするリユウたちを邪魔するかのようにモンスターが出現しだした。

「キリト、アスナと一緒に先に行け！」

「ここは私たちが処理していきます！」

「わかった、ここは任せる！行くぞ、アスナ」

「うん！リユウくんたちも気を付けてね！」

「ああ、俺たちもあらかた片づけたらすぐに追いかける！」

キリトとアスナが走りだし、それを邪魔するかのよう立ちはだかるモンスターたちを倒していく。

その後ろを守るために俺たちはモンスターたちに攻撃を加えていく。

そしてあらかた片づけた後、急いで追いかけてボス部屋に着くと絶望の真っ只中だった。

見たところ死者は今はいなかった。だが、第一層の主、イルフアング・ザ・コボルドロードの手には確かに刀が握られていた。

「ディアベエエエエル！刀だ！逃げろおおおお！」

キリトの声に顔を上げ、刀を見たディアベルは隊を下げると同時に、あろうことか単身コボルドロードに向かって行った。

コボルドロードのHPバーはラスト一本のイエローゾーンまで削れていたが刀と分かってるのに向かった理由は明白だった。

「エギル！シリカとコハルを頼む！二人は負傷者にポーションを！」

ディアベルの単身特攻を見た俺は、シリカとコハルをエギルに預け走りだす。

すでに頭の中では何故こんな状態になってしまったかの予想が付いていた、それは――

ディアベルはβテスターだった――って言うことだ。

L Aが欲しいための単身特攻、だがそれが分かっていたかのようにコボルドロードはほくそ笑み、ディアベルに攻撃を叩き込み吹き飛ばした。

すぐさまキリトが駆け寄り、ポーションを飲ませようとしていると、それをさせまいとコボルドロードは追撃に打って出た。

「しまった・・・間に合わな――「させるかあああああ！」――リュウ!!」

「さっさとディアベルを後ろに下げろ！いつまでもつか――「いや、これで終わらせるぞ！」――よせ！追撃が来るぞ、ディアベル！スキルモーションを起こすな！」

俺が弾き飛ばしていたコボルドロードの刀はすでに追撃のためにこちら、ディアベルに向かつて振り下ろされようとしていた。

その直後、キンツという音がコボルドロードの刀から聞こえた後、僅かに遅くなった

刀をキリトが防いだ。

「リュウさん、キリトさん、アスナさん！」

「ここから援護します！行ってください！」

先ほどのキリトが防ぐ前に聞こえた音は、投擲スキルを取得上昇させていたシリカとコハルによる短剣の援護だった。

その声を合図に俺たち三人は一気に行動を起こした。

「リュウ、スイッチ！」

「うらあああああああああ！アスナ、スイッチ！」

「はあああああああああ！キリトくん、スイッチ！」

「行くぞ、リュウ！」

「ああ、これでとどめだあああああああああ！！」

俺とキリトは渾身の力を込めてボスを頭から真つ二つにし、ボスはポリゴン片のエフェクトとなって、CONGRATULATIONの文字と共に消えていった。

ボスを倒し少しの静寂の後、全員の歓喜が響き渡り一時的なお祭り状態になった。



まとめ役だったディアベルも今は知り合い同士で集まり腰を下ろしていた。

俺もキリトたちと端の方へ移動し腰を下ろし、今回の戦いを振り返っていた。

「ようやく最初の一步を踏み出せた感じだな」

「ああ、でもまだ一層が終わっただけだ」

「それでも誰一人欠けてないから大きな一歩だよな」

「でもキリトさんが攻撃されそうになった時は焦っちゃいました」

「なんとか間に合っただって感じだったよね」

あの時を思い出すとよく間に合ったもんだと思いつつ、話はシリカとコハルの行動に移った。

「でもさっきのシリカたちの援護はMVP物だと思っただけだな」

「うんうん！あれがなかったら結構厳しかったよな！」

「そ、そんな大袈裟ですよ。何か役に立ちただけですし・・・」

「一か八かで運よく当たっただけだと思うよ？」

「運がよかっただけでも二人のおかげでもあるんだから素直に喜んでけ」

二人を称えていると、全員の感動をぶち壊す発言がキバオウから飛び出した。

「なんでや！なんでディアベルはんが死にかけなあかんかったんや！」

その矛先は当然だと言わんばかりに、LAを取った俺たちに、いやキリトに向けられ

ていた。

キリトに向けられた視線は明らかにおかしなものだった。

キリトはディアベルを助けただけで、死にかけてのは誰のせいでもないディアベル自身のことだ。

そんな理不尽なキバオウの発言に対して、俺は考えるよりも先に口が動いていた。

「ディアベルが死にかけた？ そんなのディアベル自身のせいだろうか。それを自分たちは何もできず、行動できた奴らに矛先を向けるなんて虫が良すぎんだろ」

「なんやと!? アンタらはボスの攻撃のことを知ってたから対処できただけやろ！ それをワイらの『お前らが役立たずなだけだ』せい．．．なんやと、役立たずやと!？」

「ああ、役立たずだ。何もできずにただ人に当たり散らす奴を役立たずとって何が悪い。どうせお前のことだ、βテスターが情報を寄こさないからこんなことになったとか思ってるんだろ？ こっちは攻略に関する情報はすべて情報屋に流してるんだ。その情報をちやんと読まないお前らが全部悪いに決まってるんだろ」

「おい、リュ——」

俺を止めるために声を掛けようとしたキリトからの声が消えた。

おそらくアスナだろう、変なところにまで気が付いてそれを止めるなんて普通は止める方が逆だろうが。

「やつぱりアンタβテストターやったんやな！」

「ああ、そうだよ。今頃気が付くなんて本当に口先だけだな。だが一つ訂正させてもらう。俺をあんな素人連中と一緒にすんな。アイツらはレベリングも知らない素人だ。だが俺は違う。どこで狩りをすれば、どれだけ効率よくレベリングできるか知ってる。それにこの先のボスの情報だつて既に持つてる、まあそれをリークする気はないがな、役立たずが足を引っ張りに来られても困るんだよ」

「そんなんチートやないか！ピーターや！」

「ピーターか・・・俺にびったりじゃねえか」

俺はメニューを操作し、LAボーンナスアイテムである「コートオブミッドデイ」を着て、さらに操作し、キリトに目配せをしてある物を送った。

「これがボスからドロップした装備だ。善人のふりをして皆を騙す奴にはびつたりの恰好だろ？こいつら、特に素人の中でもキリトは役に立つから利用させてもらった。俺に利用されるのが嫌だったら街に帰って宿で大人しくしてるんだな。転送門は俺がアクティベートしといてやるよ、死にたい奴だけ付いてくるんだな」

そう言つて俺は1人で第二層へ続く階段を上つて行つた。

視界の端に今にも悲しきで泣きそうな三人と拳を握りしめて俯いているキリトを残して――。



俺は今、自分が情けなくて仕方ない。

キバオウから向けられた非難の目をリュウが肩代わりした。

あれは俺に対してだけ向けられた視線だったのに、俺自身は何も出来なかった。

いや止めようとはしたんだ。でもアスナに止められてしまった。

あの時のアスナの顔はリュウの行動を止められない悲しさが見て取れた。

気分が沈んでいる中なんとか持ち直そうとしている時に、またしてもキバオウから非

難の声が上がった。

もちろん矛先は俺だ。

「キリトはん、どうせアンタもβテストなんやろ。だったら詫び入れてもらわないかな、情報を隠してたこと謝れや！」

「別に情報は隠してない！持ってた情報はちゃんと流してたんだ！誰にもさっきのことなんか予想できない！」

「んなの関係ないわ！さっさと詫び『いい加減にして!!』入れんか・・・」

俺とキバオウが言い合いを始めようとしたその時、すぐ近く——アスナから止めが

入った。

「リュウくんが・・・リュウくんがどれだけ辛い思いをしながらあんなこと言つたと思つてるの!?!相手のことを考えもしないで勝手なこと言わないで!!」

「アスナ・・・」

「アンタ、アイツの肩持つんか!アンタだつてアイツのこと何も——「分かるよ」——」

「私はリュウくんの考えてること、今どんな気持ちなのか分かる。リアルなことは言つちやだめつて言われたけど私とリュウくんはリアルで幼馴染、小さい頃からずっと一緒だつたから分かる。きつと今重圧に押しつぶされそうになつてる。ただβテストの人たちを、キリトくんを守ろうとしただけなのにこれからずっと皆から向けられる視線に怯えながら生きていかないといけないっていう重圧に押しつぶされそうになつてる」

「キバオウ、アンタの言う通りβテストの中には情報を隠し持っている奴はいる。ちゃんとカタナスキルのことを説明しなかつた俺にも非はある。だけどリュウはそれすらも自分のせいにして、自分だけを悪にして皆をまとめようとした。それ以上にリュウにはもつと辛い重みがあつたんだよ。お前らはβテストつて一括りにしてるが、リュウはβテスト時一度たりとも圏外に出たことなんてなかつたんだよ。ずっと圏内の散策に時間を費やして、階層が進めば次の街の中の情報収集に時間を使つていたん

だ」

そんな奴に向けられる非難の目の重みなんて俺には想像つかない。

シリカとコハルが泣き崩れるアスナに寄り添うのを見た後、一息ついてから周りを見渡し、皆が聞いていることを確認して話を続けることにした。

「配布されていた攻略本を今持つっている奴はいるか？ いたら持つてない近くの奴らにも見えるようにしてやってくれ」

その言葉を聞いて、持つている奴はストレージから取り出して周りに見えるように置いていた。

「じゃあまずボス情報を見てくれ。カタナを持つていると書いてある部分があるだろ？ そこからそのまま読み進めれば分かるが迷宮区内に隠し部屋があつてそこに壁画として記されていたつてあるだろ？ それはリュウ自身が自分の目で確かに見てきた情報だ。まだ嘘だと思ふなら一階に続く階段の壁、戻るときに見るから左の壁だな、そこにあるから見て来い」

それを聞いて幾つかのグループが見に行つてみようと話をしていた。

「それと今攻略本を持つている奴らに聞きたい。ここにいる全員そうだと思うが一層で宿を取つてははずだ。その宿の情報はどこから手に入れた情報だ？」

その言葉に全員が同じ答えをした。『この攻略本に詳しく載つていた』

「その情報はリュウがβテスト時にかき集めた情報だ。もちろん変わっているかもしれないから情報屋に確認してからリークするように言っていたらしい」

その言葉を皮切りに俺たち4人とディアベル、キバオウを除くほぼ全員が立ち上がり、リュウの後を追うように走ってボス部屋から出ていった。

そんな中、1つのグループがキバオウに止められた時に言っていた。

『あの人に謝りに行くんだ、退いてくれ』

それを聞いたキバオウはさつきまで一緒に非難していたはずの奴らが走っていくのをただ茫然と見ていただけだった。

俺はメニユーを操作し、リュウから受け取ったアイテム「コートオブミッドナイト」を装備した。

それを見て、アスナ、シリカ、コハルも立ち上がった。三人の表情からはリュウに文句を言つてやるというのが伝わってきた。

(リュウ、説教を覚悟していた方がいいぞ・・・)

そう思いながら先に行く三人の後を俺は追った。

大切な仲間を失わないために――。

## 第6話 和解の一步

ボス部屋での一件後、俺はアクティベートしておくと言っておきながら道中の岩陰に座り込んでいた。

「はあ……」

何度目のため息だろう……。俺は後悔はないはずなのに自分の行動を受け入れられないのか、気が付けばため息が出ていた。

でも、やっぱり後悔はない。リアルではなくMMOでの知り合いであつたキリトを守りたかつた、ただそれだけの行動だ。

「でも、結構来るもんなんだな……。……気持ちのリセットのために一回寝よう、精神崩壊はこの世界じゃ致命的だし」

寝て起きたらきつとアスナが隣に座っていて「おはよう、リュウくん」って言うてる、そんな淡い期待が胸の奥に沸いている中、俺の意識は暗い闇の中に沈んでいった（……しつかり睡眠は取るべきだな、うん。寝不足だからネガティブ思考になるに違いない。）



「ねえねえリユークくんは好きな子いる？」

「アーちゃんは？」

「リユークんだよ！リユークくんは？」

「僕もアーちゃんのこと好きだよ」

「本当!? やった〜!!」

(懐かしい夢、見たな……。)

女の子が俺のことを好きと言ってくれて、俺も女の子のことを好きと言った。そんな小さい頃の大切な思い出。

しかし、あの頃はどっちも恋愛感情なんてなかっただろう。

「アーちゃん……」

「リユウ、起きたか？」

急に声を掛けられ、聞かれたんじゃないかとビクビクしながら振り向くとキリトが岩

の上座に座っていた。

そんなキリトは起きたのを確認した後、不思議そうな表情をしていた。

「どうかしたか？」

「いや、何でもない。ていいうか何でいるんだよ？」

「俺がいる理由はお前の周りを見ればわかる」

「周り？」

俺の周り、正確には俺の両隣には何故か寝ているアスナとコハルがいた。

シリカに至っては無防備にも膝の上に乗って抱き着くように寝ていた。

何でよりによってまだ精神が安定していない時に来るんだよ。

しばらく放っておいてくれればまた普通に合流できたつていうのに、一人になるのは許さないつていうのか。

「アスナ言つてたぞ。お前が俺たちβテスターたちを守るために重圧を背負つてるつて。．．．リュウ、悪かつたな」

「なんだよ急に謝つたりして？」

「俺はあの時、お前の行動に甘えてた。本当は今お前が背負つてる重圧は俺が背負わな  
いといけなかつたんだ！それなのに俺は．．．反論すらしなかつた。だから——」

「別に俺はお前を恨んだりなんかしねえよ。それにお前は俺が寝不足なのを知つてたか

ら見つけても起こしたりしなかつたんだろ？」

「そうだけど、それでも俺は……」

「じゃあこうしよう。今後の攻略や素材集めの戦闘で一緒に行動するときには背中を守ってくれ。俺を死なせないでくれよ、相棒？」

「……ああ、絶対に死なせない。生きて皆で現実世界に帰ろう」

「……さて、そろそろアスナたちを起こして行くか。……ああ、アクティベートしてねえんだけど」

さつきまで寝ていたんだからしていないのも当然なんだが、少しでも申し訳ない気持ちはある。

下手すると始まりの街でいつまでも待つてるやつらに文句を言われるかもしれない。

「それなら攻略に参加していた奴の誰かがやってくれてるはずだから安心しろ」

「いや安心できないんだけど……。俺、ちゃんと街に入れるのか？入ってすぐに囲まれて外に追い出されたりしないか？」

「俺が言うのもなんだけど怯えすぎだろ。それにアイツらは俺たちやβテスターに対して少しは物腰が柔らかくなると思うぞ？」

キリトが何を言っているのか、俺には分からなかった。

「お前が出てった後に攻略本のこと話したんだよ。皆言ってたぞ、謝らないとって」

「・・・そうか。まあちゃんど攻略本が渡っててよかったよ」

「素直に喜んだらどうだ？」

「うっせ、まだ信じられないのに喜べるわけないだろ。ぬか喜びになったら俺は引き籠るぞ」

「おいおい・・・」

そんなことを言いつつも俺は元気を多少取り戻しキリトと一緒に笑いながら喋っていた。

それからしばらくしてアスナたちが目を覚ました。

そして説教を受けていた。

「リュウくん、反省してね？」

「本当にそうですよ！何で一人で背負い込むんですか！」

「そんなに私たちは頼りないの!？」

「あ、いえ、そんなことは全然ないです、はい・・・」

アスナたちと同じ気持ちとはいえ、さすがに可哀想に思えてきたキリトは止めに入った。

「なありユウも反省しているみたいだしその辺で」

「「キリトくん（さん）は黙ってて（ください）!!」」

「はい、すいません・・・」

（おい、めげるなよ!?)

（すまん、俺には無理だ・・・）

その後30分説教が続いたのだが、シリカのお腹が鳴ったことよって終了となり、第二層の街で俺が昼飯を奢ることで三人は許すことにしたらしい。

安全地帯の岩場から少し歩いていくと第二層主街区《ウルバス》が見えてきた。

そして街の入り口に近づくにつれて人が待ち伏せている・・・わけではなく、始まりの街よりは人は少ないが賑わっていると言つていいほどには人で溢れていた。

「なあもう一層に帰つていいか?」

「あの時の威勢はどうしたんだよ、まあしょうがないか。でも帰さないからな?」

「それにしても凄いとこですな」

「うん、外周だけ残して繰り抜いたところに街ができてるんだもんね」

「とりあえず入ろつか。リュウくんの奢りでお昼も済まさないといけないし」

「ああ、そうだな。もういいや、覚悟決めた。さあ行くぞ、キリト!」

「俺の前を歩きながら言つてくれたら尚よかつたんだけどな」

そう言いながらも一層の恩返しも兼ねてなのかキリトが先頭に立って街の入り口の

門をくぐり抜けた。

と同時にリュウたちは一層を一緒に攻略したプレイヤーたちに囲まれてしまった。

そして……

『悪かった！許してくれ！』

その言葉に対して俺は哑然とするしかなかった。

その後の彼らからの言葉は謝罪の言葉ばかりだった。

そこからさらに感謝の言葉の連続が続き、最終的には俺自身が止めるまで続いていた。

「別の意味で死にたい……」

「あはは……ずっと褒められっぱなしでしたもんね、リュウさん」

「リュウが止めなかったら今でも囲まれてたよね……」

「まあでも嫌われ続けているよりはマシだろ、リュウ？」

「そこは否定しないけどさ……。ああもういいや、さっさと飯にしよう。キリトまだ着かないのか？」

「ほらあの看板の店だよ。二層が野牛型モンスターが多いからか牛肉系？料理の店が多いんだ」

「や、焼き肉店っすか、容赦ないっすね孤独の漆黒の剣士さん……」

「比較的安い店選んでやったから大丈夫だつて。ていうかなんだよ、その二つ名……」

キリトの後に続いて店に入って、NPCによって案内された。

キリトには手慣れた応対だった。やるな孤独の漆黒の剣士……。

「それで何なんだよ、さっきの二つ名は？」

「付けてみたんだ、気に入ってくれ」

「しかも押し付けるのかよ。ありがたく捨てさせてもらう、そんな不名誉な二つ名」

「俺が30秒足らずで考えたやつを捨てるのかよ、酷いな」

「お前の方が酷いわ」

で、さっきから女性陣が静かすぎて何かあったのかと思つたら

店の高い肉を三人でどれをどれだけ注文するのか悩んでました。

どうやらリュウのコルはここではほぼなくなるみたいです。

(……装備強化はできないな、うん。)

昼食を済ませた俺たちは二層のガイドブックの内容に大きな違いはないか確認するために

街の中を練り歩き、そんなに大きな違いがないのを確認して五人揃って一層の宿に

帰  
つ  
た。  
。





「ああ、ていうか何か揉めてないか？」

「今日は強化は中止だな、さっさと三人を連れて退散しよう。あまり騒ぎにしたくない」  
そう思い近づいていくとこつちに気が付いたアスナが加勢しろと言わんばかりに話を振ってきた。

「リュウくん！この人にリュウくんも言つてよ、強化失敗じゃ武器が壊れることはないって！」

「いや巻き込まないで……って待てアスナ、今の言葉間違いはないか？強化失敗で武器が壊れたって」

「間違いないよ、目の前で粉々になったの！」

「ですから、正式サービス……されて新しく追加された……要素なんじゃないかって……言つたじゃないですか……」

「……なあ今回みたいなのはアンタの店で何回くらい発生したか聞いてもいいか？」

そうリュウウに言われた店主ネズハは少しビクツつとする反応をしたが、その後は申し訳なさそうに話してくれた。

「ほとんど……見たことはないです……前に一度だけ……見たことがありますけど……」

「そうか。そのくらい確率ならまあアンタを疑うのは間違いだな、俺の連れがせめて悪かったな」

「いえ、あの・・・こちらにも非はありますから・・・」

本当に申し訳ないと思っただけか立ち上がり、こちらにずっと頭を下げていた。

「お詫びをしたところなんですが・・・その、お連れの方の同じ武器であるウインドフルーレの在庫がなくて・・・ランクが下がっちゃうんですけど、アイアンレイピアをお持ちになりますか・・・?」

「うう・・・じゃあそれで我慢します・・・」

「いや待てアスナ。ありがたい提案だが武器に関してはこつちで何とかする。成功失敗はこつちの責任だからな」

「そ、そうですか・・・あの、こんなこと言えた立場じゃ・・・ないんですけど・・・またのご利用・・・お待ちしてます・・・」

ネズハのその言葉をしっかりと聞いた後、まだ文句が言い足りないであろうアスナをコハルとシリカに引っ張って行ってもらいつつ、その後を追いながらさっきの話をキリトは話していた。

「キリト、今の話どう思う?」

「武器消滅だろ? ない話ではないだろうけど証拠がないし、何より俺たちは実際には見えないから何も言えないな」

「いや俺は完全に黒だと思う。あの店の店主、ネズハが言っただろ? ウインドフルー

レがないからアイアンレイピアを持たないかって」

「ああ言つてたな。でもそれだけで黒とは言えないだろ」

「ああそうだ。でも普通武器消滅させてしまったなら一つ下のランクのガーズレイピアを渡そうとするはずだ、ここから脱出しようと考えてるならな。なのにアイツははじまりの街でも買えるアイアンレイピアを渡そうとしてきた、今装備させようとするかのよう」

「今装備つて・・・おい、まさか!?!」

「まだ可能性の話だが・・・今日は宿に帰ろう、そこで証明してやる」

俺とキリトが来るのが遅いのと、武器消滅での悲しみにより泣きそうな顔でアスナがこつちを見ていた。

それを見た二人は話を切り上げ、焦って三人を追いかけてホームの宿に向かった。

向かったはずだったが、アスナの限界が来たのか歩く速度が極端に遅くなったため近くにあったベンチに座らせた。

その時に何故か俺も一緒にアスナの隣に座っていた。

一度隣に並んだ時に手を握られていたから自動的に座つたのだ。

そして、アスナの頬に二つの透明な雫が流れた。

「うう・・・リュウくん・・・」

「ああ、はいはい。顔隠してやるか泣け泣け」

「うわああああああああ」

少し路地に入ったところで助かったと俺とキリトはホツと肩を撫でおろした。

人通りのあるところで泣かれたら何を噂されるか分かったものじゃないだろう・・・。

(リユウ、さっきの話なんだけど・・・)

(分かってる。けど、少しだけ待ってやってくれ)

それからしばらくして落ち着いたアスナを連れて再びホームに向かった。

「さて検証と行こう」

「急に始めるんだな。まあ俺もリユウの見解を知りたい」

「俺の見解ではアレは消滅じゃなくて、クイツクチェンジだろうな」

「クイツクチェンジって何ですか?」

俺の言葉にシリカが首をかしげていた。

そういえば説明も習得もさせてなかったと思い、簡潔的にだが説明を始めた。

「クイツクチェンジってのは片手武器の共通派生機能で、わざわざメニューウィンドウを操作しないで、ショートカットアイコンを利用した機能なんだ」

「まあでも俺やリユウみたいに複数武器を持つてるやつが優先してとるスキルだな」

「そのスキルが使われてたとしても消滅エフェクトはどうするの?」

それについては見たほうが早いだろうと思ひ、ストレージから黒パンを取り出して机の上に置いた。

黒パンを見たキリトは理解したらしく、たしかにそれなら・・・と呟いていた。

「黒パン？」

「この消費時間が来るとどうなるか知ってるか？」

「ポリゴン片になつて無くなりますよな？」

「その通り。だからそのシステムを利用して武器が壊れたかのように演出する。それでプレイヤーの武器、特にアニールブレードを持っている奴はカモだろうな」

「たしかにな、あのクエストを好き好んでやる奴はいないだろうな」

キリトに頼まれて一緒に受けたがああ時はPKにあつたからいい思ひ出はない。

ドロップ率の問題が一番の理由ではあるんだがな。

「その方法で武器とコルを騙し取っている事はわかつた。で、クレームでも言いに行くのか？」

「いや、言つても白を切られるだけだ。それにネズハはやらされてるだけだと思う」

「それつてギルドメンバーについてことか!?! 仲間に無理やりそんなことさせるなんて酷すぎるだろ」

「でもそれならギルドを抜けちゃえばよくない? 何らかの事情があるつて考えたほうが

いいのかな？」

現実での友達かもしれないし、脅されて仕方なくかもしれない。

そしてもう一つ可能性がある、それは――

「とりあえず明日俺はネズハのところに行つてくる」

「行つてどうするのリュウくん、クレームでも言うの？」

「いや、ネズハの口からはつきりと事情を聞こうと思つたんだよ。来るか？」

「うん、行こうかな。ちゃんと話を聞いておきたいし」

「私とシリカちゃんは明日採取クエスト行くことにしてるからパスするね」

「あとで聞いたお話を聞かせてもらえればそれでいいですよ」

「俺は一応アルゴと合流して話をしとく。アイツのところにも情報は入つてきてるだろうからな」

俺とアスナでネズハに話を聞いてくることにして、残りの時間は各々の時間を過ごすことに決定した。

その後キリトに誘われ、今使える戦闘スキルで効率のいい連携スキルを考えていた。

その時に連携スキルを一切考えていなかったことに対してキリトに呆れられてしまった。

そんな余裕なかったし、β時代ではアレだったんだから仕方ないじゃないか。